

第一講 隨筆

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ヨーロッパで私をはじめ感じて感じたことは、人間が石造りの建物に住んでいるという事実から受ける奇妙な嘔吐感、または眩暈感であった。

その時、私があらためて自覚した自分の存在とは、日本で木という有機物でつくられた建物と、目に見えない連関の仕方でもって生きていた有機的存在であるということだった。木は自然の変化に微妙に感応し、即応しながらわれわれとかかわりあっている。そのあり方は、一つの共通の要素に働きかける親和力をとおしてとでもいうべきものである。自然から切りとられた木でさえも、家という構造の中では、同じく自然的で有機的な存在であるわれわれと密接に結びついている。

だが、石は何という意味を持っているのであろうか。石が人間に及ぼす働きは二重であり、両極的であると私は考える。つまり石は自然のキョウイに対しては堅固に人間を守るが、同時に石造りの建物の内部では、明確に人間を拒否しているということである。その非情性は、有機的存在（人間）を、ただ在ること自体において即物的に否定しようとする沈黙の暴力を持っているといつてよい。石によりかかった場合、その冷たさということは、われわれが熱を奪われているという感触においてである。もし、人が石を抒情的に歌うこともなく、石を馴れしたしんだ概念で呼ぶこともやめ、その「石」にかこまれて人間が生きているという事実を考えてみた時、石は

15

〔出典〕

饗庭孝男

「石と光の思想 ヨーロッパで考えたこと」

はじめてその非情な本質をおのずから示すだろう。こう考える時、私はいつも、カミュがいった「一つの石がどんな点で異質であり、われわれにとつて還元不可能なものか、自然が、一つの風景が、どれだけの強さでわれわれを否定しうるか」「あらゆる美の ^b ナイオウには何かしらある非人間的なものが隠されている」という言葉を思い出すのである。私は石が人間を守るといふ働きよりも、それを拒否するといふ働きに注目せざるをえなくなった。この点に関して、私が持った一つの印象を忘れることができない。

² 私は南仏のピレネー山脈の麓の高地にあるポーという町で、夏の一ヶ月半をすごした。透明な夏の光の下で、それは生活の匂いの殆んど感じられない抽象的にまで美しい町であった。私はこの町でひらかれていた夏のボルドー大学とトゥールーズ大学の講義に出ていた。大学に通う私の道筋には、私の心をいつも奇妙に惹きつける一軒の建物があった。その屋根裏部屋の窓から、ほとんどいつも黒衣の老婆が、じっとすわったまま通つてゆく私を ^c ギョウシしているのである。老婆の姿は、生きている死者のように映じていた。外には白くやけたぎり、垂直におちる夏の光と緑の葉のそよぎが目にも痛いまでにさわぎたち、通つてゆく私のまわりには肌の匂うようなフランスの美しい少女や、英国、あるいは遠い北欧から来た少女たちが行ききしていた。

或る日、私はその老婆が窓辺にいないくて、家の前の小さな公園のベンチに座っているのを発見した。おそらく家族のものが下に降ろしてやったのであろう。よく見ると、彼女は殆んど手足が不自由であり、銀色の杖に ^d 凭れて ^e わずかに呼吸していた。燃えるような生命の歌の夏の光の中で、その姿は静かにも ^d ザンコクな光景であった。彼女は単に老衰によつておのずから、自然に死に向つていくといふ印象を与えるのではなく、その石造りの建物の中で、石によつてうけた、緩慢

にして非情な歩みに内部から無残に犯されているように感じられるのであった。それは生きている「死」であった。

私はあらためて、英国風の静かな美しいポーモン公園のベンチにも、駅を見下ろす高台の菩提樹の蔭のベンチにも、手足の不自由な多くの老人が、何時間も、時には午後中ずっと、座ったままにまどいことに気がついた。そしてそのベンチの傍らでは、傍若無人な白人の若い女性と黒人が、いつ果てるともない愛撫をくりかえしているのであった。「死」と「青春」のこのコントラストは、影と光のように私をとらえて離さなかった。

手足の不自由な老人は、日本よりもはるかに目につく。彼らは一様に、おのおのの痛みを和らげる形に応じた銀色の杖や手押車に身をささえ、凭れかかっていた。そしてその傍らを、小鳥のように駆け抜ける少女たちにくらべて、むしろ後退している程に見える足どりで歩いている。医学の見地からは、このようなりユーマチとも骨の病気ともみえるものを光の不足や風土のせいにするのであろうか、私にはわからない。しかし、私の印象では、この病気は、石造りの建物の中の、生の緩慢な壊死^{えし}の現象のように思われてならなかった。石の非情性と沈黙の暴力が、徐々に有機体の生の機能を犯してゆくのであろうか。

思えば木と馴れ合い、自然と調和している日本人にとっては、「死」は多く一つの自然の帰結に映じるのに反して、ヨーロッパにおける死の意識は、今のべたような私の印象をもとおしてみる時、一つの暴力³とも力動的な作用ともなって人々の心に生きているのである。そこではじめて「石」を^eバイカイにして「生」が「死」と対話をはじめると私は思う。そしてヨーロッパの人間は、運命とは何かという執拗なまでの問いをくりかえして止まないのである。ヨーロッパの

15

10

5

思想の原点はこの対話なくしては成り立たない。一種の名状しがたい嘔吐感、眩暈感にともなう有機体としての存在の不安が形而上学的色彩を帯びてはじめて私の心にイメージを結んだのは、その事実を考えた時であった。

ハイデッガーでなくとも、われわれは、人間が、世界の中にいわば、「辱められた存在」として投げ出されているのを感じるが、それがもつとも鮮やかに印象づけられたのは、この石造りの建物と私との対話に外ならなかった。「石」はわれわれを拒否する。その拒否自体がわれわれの生の逆証明になりうるのである。ある意味では石の思想とは人間の不幸の思想であり、精神的リユーマチスムの思想である。老人たちの苦悩の足どりは、病の状態において明確な生への問いを、執拗にしてつぎることのない石との対話の思想が何であるかを私に教えてくれるのである。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に改めよ。

a		b		c		d		e	
---	--	---	--	---	--	---	--	---	--

問二 傍線部 1「明確に人間を拒否している」とあるが、こうした「石」のあり方についての筆者の考えを説明したものとして最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、記号で答えよ。

イ こうした石のもつ非情な性質は、われわれが石に馴れしたしみ石を抒情的に歌うことを禁じてしまう。